

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01083

研究課題名（和文）女子修道院と都市の発展：13世紀ブリュッセル都市化過程における女子修道院の重要性

研究課題名（英文）Convents and Urban Development: The Significance of Convents in the Urbanization Process of Brussels in the 13th Century

研究代表者

舟橋 倫子 (Funahashi, Michiko)

慶應義塾大学・文学部（三田）・講師（非常勤）

研究者番号：70407154

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：13世紀の都市ブリュッセルは、急激な経済発展に起因する対立と矛盾の絶え間ない調整の渦中にあった。本研究は、聖俗の多様な人々を修道院空間に包括する共同体として都市近隣に新たに設置された3か所の女子修道院に焦点をあて、これらの活動を重要な構成要素としていた中世都市の特質を検証した。女子修道院は周辺の低湿地を活用した養魚によって都市の食糧需要を支え、恒常的な人口流入による小教区教会の再編の中で、都市の在俗聖職者との妥協点を探りながら、在地有力者から多数の十分の一税取得地を集積して所領を形成した。様々な要素を包含してゆく女子修道院の所領経営を軸として、都市と周辺社会の再構築が進行していったと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年のジェンダー史への関心から、中世都市において聖と俗の狭間で活躍した「敬虔な女性達」が脚光を浴びているが、本研究では、都市に隣接して創設された、所領経営に基盤を置く伝統的な女子修道院もまた中世都市世界を読み解く多様な可能性を持っていることを明らかにした。

恒常的な人口流入と、都市と農村の経済発展のギャップによって引き起こされる危機的状況化で進行する地域社会の再編と新たな秩序形成において、女子修道院が果たした機能の実態を解明し、その基盤にある社会的・経済的・宗教的コンテキストを読み取る試みによって、ほぼ未開拓であったブリュッセル初期史にアプローチした点が独創的であったと考える。

研究成果の概要（英文）：The city of Brussels, in the 13th century, was at the heart of a constant adjustment of conflicts and tensions caused by rapid economic development. This study focuses on three newly established women's abbeys in the outskirts of the city as communities that integrated a wide range of diverse individuals in their monastic spaces and examines the characteristics of the medieval city that made these activities an important component. The abbeys provided for the city's food needs through fish farming in the surrounding marshes and, as part of the restructuring of the parish church due to the constant influx of population from nearby agricultural villages, they sought compromise with the secular clergy of the city and accumulated numerous tithes from local powers to form their domains. It is believed that the restructuring of the city and the surrounding society progressed through the manorial management of the abbeys, which included various elements.

研究分野：西洋中世史

キーワード：中世都市 女子修道院 十分の一税 都市と農村 小教区教会 養魚 シトー会修道院 ブリュッセル

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

中世の女子修道院について新たな研究関心が高まっている。画期となったのは2017年にフランスのヴィエンヌで開催された修道女をテーマとした国際研究集会であった。そこでは細分化してゆく研究状況の中で、議論の共通基盤の確立を目指して、実証研究の包括的な整理による論点の洗い出しと今後の課題の提示がなされた。特に強調されたのは共同体内部での男性と女性の在り方であり、考古学発掘を援用した多数の実証研究によって修道院空間の可視化が試みられた。また、これまで研究の遅れてきた中世盛期のベネディクト会修道女の再検討から中世社会を読み解く多様な可能性が期待できることも指摘された。

修道院と周辺社会の諸関係に関する研究を進めてきた申請者も、女子修道院を研究視角とした2016-2018年度の科研費研究課題(基盤研究C)において、12世紀のベネディクト会修道院アフリヘムの都市近郊に設置された女子分院が、牧畜を中心とした未耕地経営による食料生産と、都市の肉・魚業者家系という社会集団の形成に決定的な重要性を持っていたことを検証した。以上の研究は、都市ブリュッセルの順調な経済成長を暗黙の前提として進められた。しかし、近年の環境史の目覚ましい成果は、温暖期とされてきた12世紀以降も小寒冷期が循環的に現れ、飢饉や疫病によってブリュッセル地域が度々危機的状況に陥ったことを指摘している。そのような研究潮流を踏まえて、流動的な状況化下で13世紀初頭に新たに都市近隣に設置された女子修道院の社会的機能を再考する必要性を痛感した。

特に、シトー会に属するラ・カンブル修道院に関する研究史は豊富とはいえず、伝統的なシトー会女子修道院という枠に研究視角が固定されてきた。しかし、近年のシトー会女子修道院研究の進展は、個々の女子共同体の多様性を明らかにしてそれらを規範的なモデルの下に一括りにすることに警鐘を鳴らし、個別研究による再検討の必要性を強調している。また、ラ・カンブル修道院文書庫収蔵の多量の文書史料は網羅的調査も未だ行われていない状態にあった。また、ブリュッセル市によって進められた一連の考古発掘と調査においても中世盛期の修道院の検証は部分的なものに留まっており、それらと文献史料調査との突き合わせが求められている。従って、これらを検討素材とした包括的な研究を行うことが重要であると考えた。

このような研究潮流を踏まえて、本研究は、社会経済関係の再編が急速に進展する13世紀初頭に都市的集落に隣接する女子修道院に着目して、それらの経済活動が都市化過程において果たした社会的意義の再検討を目指して開始された。

2. 研究の目的

本研究の目的は第一義的には、恒常的な人口流入と都市と農村の経済発展のギャップによって引き起こされる危機的状況下で進行した地域社会の再編と新たな秩序形成において、女子修道院が果たした機能の実態解明と、その基盤にある社会・経済的・宗教的コンテクストの読み取りにある。具体的には、まず最新の地域研究と考古発掘調査から12世紀から13世紀にかけて都市的集落ブリュッセルとその周辺地域で進行していた変化を検証する。次に未刊行文書史料の分析から、いかなる社会的なニーズによって都市的集落ブリュッセルに近接して女子修道院が設置されたのか、どのような土地を集積し、いかなる性格の所領経営が実践されていたのか、中核となる修道女以外にいかなる社会層を内包した組織であったか、彼女達・彼らと外部社会とはどのように繋がっていたのかを明らかにすることで、中世盛期の女子修道院の実態に迫り、こうした組織を重要な構成要素としていた中世都市の特質をさぐる手がかりを見出すことが本研究の当面の目標となる。

3. 研究の方法

フォレ、グラン・ピガール、ラ・カンブル女子修道院の旧文書庫収蔵の文書史料群は、現在ブリュッセル市文書館に所蔵されているが、当該文書館は史料のデジタル化を進めておらず、また詳細な目録も作成されていないため、研究の第一段階として、これらの文書史料の調査と網羅的な収集に着手した。現ベルギー地域の文書史料のデジタルアーカイブスである *Diplomata Belgica* にも、当該文書史料は部分的にしか収録されていないため、文書の目録作成と読解、地名・人名の照合による情報の整理を独自に進める必要があった。正確な情報整理のためには、現地に一定期間滞在して、文書館のギラルディン博士、修道院文書の分析を進めているブリュッセル大学のディルケンス教授およびウィルキン教授、また都市史の第一人者であるビレン教授との史料検討会が必須であった。しかし、2020年3月から開始された新型コロナウイルスによる渡航制限と現地の研究機関の閉鎖によって、申請者自身による網羅的な史料収集と対面での検討会を行うことが不可能となった。そのため、分析対象を2019年度に収集を終えた文書(1201年~1276年までの計214通)に限定し、現地の専門家達とオンラインでのやり取りによって研究を進める方法に切り替えた。さらに、文書館の再開後に現地の大学院生に依頼して可能な限りの現地調査を継続した。新型コロナウイルスによる制限期間中は、収集した文書214通の情報整理を行うとともに、すでに収集を終えていたフォレとグラン・ピガールの文書史料の分析によってラ・カンブルとの比較検討を進めた。2022年度にベルギーの研究機関において全ての制限が撤廃されたため、2022年2月までの分析結果を取りまとめてブリュッセル大で史料検討会を行

い、申請者の研究成果に関する討議によってラ・カンブル修道院文書分析についての知見を深めることができた。加えて、ラ・カンブル修道院の発掘調査に参加した研究チームとの情報交換によって、実際の発掘調査の様相と成果さらに今後の課題について論点を共有した。

4. 研究成果

本研究課題の採択中に都市形成過程と近郊の女子修道院に関していくつかの成果を挙げる事ができた。

2019年に刊行された『日仏歴史学会会報』にフランス語の論文として掲載された「La vie des religieuses dans les prieurés de Forest et de Grand-Bigard de l'abbaye d'Affligem (XIIe-début de XIIIe siècle)」 「アフリヘム修道院女子分院フォレとグラン・ビガールにおける修道女の生活(12-13世紀初頭)」では、ベネディクト会の男子修道院であるアフリヘムの分院ネットワークの中で、二つの女子分院だけが急激な都市的な進展を遂げてゆくブリュッセルの近郊に設置されたことに着目して検討を進めた。両分院は13世紀初頭にそれぞれ女子修道院として独立し、近隣のラ・カンブル修道院と同地域に、一部錯綜した所領を展開していることから、ラ・カンブルとの比較検討によってブリュッセル地域の女子修道院の特質を検出することが期待できた。本稿において、女子修道院が柔軟で複合的な団体であり、出身家系との私的な経済的関係を維持して個人的な活動が許された一部の修道女と、院の内外で実務を行う修道士の両方によって運営されていたため、様々な社会状況に対応する個別性と柔軟性が担保されていたことが明らかとなった。アフリヘム修道院による分院ネットワークの中で農村の所領経営に専心する男子分院に対して、女子分院は都市社会との窓口としての機能を果たしていたと考えられるのである。

この時期にブリュッセル地域で進行していた状況の分析は、2020年に刊行された妹尾達彦編・著『アフロ・ユーラシア大陸の都市と社会』に掲載された論文「12世紀ブリュッセル地域の危機とアフリヘム修道院」において取りまとめた。本稿においては、気候変動によって引き起こされた飢饉と疫病について年代記に記載されたテキストを読み解いて、特に都市ブリュッセルと周辺地域が陥っていた危機的状況と修道院の救貧活動による緊張緩和への貢献を検証した。また、新型コロナウイルスによる研究機関閉鎖の直前である3月12日に、ブリュッセル大学中世史セミナーで「Reconsidérer le document baptisé [Pactum]」「Pactum文書の再考」という題目で修道院の十分の一税関連文書の分析を発表した。そこでは、収入の十分の一を貧民救済に充てることで、修道院による十分の一税の保持を正当化するというアフリヘム修道院の戦略を提示した。さらに、近年新たな注目を集めている十分の一税に関する学界動向を整理し、危機的状況下で実践される救貧活動の一環として修道院が十分の一税を活用した実態の解明への指針を明確化したのが、2021年のブルゴーニュ公国史研究会の研究報告「ベルギー南部の修道院における12・13世紀前半の十分の一税関連文書の分析と今後の展望」及び、社会経済史学会九州部会の「中世盛期低ロタリングアにおける十分の一税再考 新たな分析視点と12世紀修道院による実践の分析 - -」と題する報告である。これらにおいては以下の点が検証できた。

ロウエルス等によって提起された新たな分析視点において、十分の一税がキリスト教社会に特徴的な交換と再分配を促進し、社会的結合に本質的な役割を果たしたことが共通理解となっている。ブリュッセル地域においては、十分の一税は俗人在地有力者の世襲財産の一部として、12世紀末から相次いで創設される修道院への主要な譲渡対象となっていた。十分の一税取得地は13世紀初頭から、フォレ、グラン・ビガール、ラ・カンブルに向けられた寄進の半分以上を占めており、この時期の所領形成に特徴的な要素となっていた。12世紀のアフリヘム修道院においては、男子分院と女子分院それぞれ固有の役割を果たすことによって全体が支えられる構造になっていたが、13世紀に入って両女子分院は個別に集積した都市周辺所領での所領経営に基盤を置く女子修道院として独立へと向かってゆく。クルティスあるいはグランギアでの所領経営を担ったのは修道士と助修士であり、50人という少数に人数が制限された修道女達の活動は本院内に限定されてゆく傾向にあった。しかし、彼女達は依然として外部の出身家系メンバーとの関係を維持しており、特に女性親族からの世襲財産を相続する事例が度々観察される。文書史料からは、修道女が受け取った世襲財産が、多くの場合、貧民救済と十分の一税の買い戻しに充てられていたことが確認できた。

このような検討と並行して、低湿地というブリュッセルの地域特性に適合的な河川や養魚池での淡水魚の調達と都市への供給が、いずれもセンヌ川沿いの低開発地域に設置された女子修道院の所領経営の要として進められたことに着目して、2021年に日本ハンザ史研究会第35回研究会において「中世盛期南ネーデルラントの淡水魚」と題して、フォレ、グラン・ビガール、ラ・カンブル修道院の文書史料を素材とした漁撈と魚食についての報告を行った。

以上のような研究成果とラ・カンブル修道院文書史料分析によって、最終年度に本研究のテーマである都市化過程における女子修道院の重要性を包括的に取りまとめる論文を作成した。以下は、中央大学人文科学研究所紀要に掲載される論文「中世盛期ブリュッセル地域の修道院所領

ラ・カンブル修道院13世紀前半文書の分析」の内容の要約と、そこから浮かび上がった今後の課題である。

本稿では、ラ・カンブル修道院の旧文書庫に所蔵されていた単葉文書群を主要な素材として、13世紀前半を中心として情報の整理と分析を行った。主要なグランギアと所領拠点は都市ブリュッセルに隣接する本院を中心として25キロ圏内にあり、それらに緩く結びつけられてゆく多

面的な所領もほぼ 50 キロ圏内に位置していることから、全体としてあるまとまった空間が形成されていったと考えられる。特に本院とその周辺所領は、センヌ水系の低湿地や森林に集中的に展開し、所与の地理的条件に応じて、養魚池を中心とする都市の需要に向けられた経済活動の場を整備していったことが明らかとなった。近年の研究において、複数の養魚池を利用するコイ養殖の技術がシトー会修道院において開発されていったことが注目を集めている。今後は養魚技術という視点からもラ・カンブル修道院とシトー会の関係を検討する必要があると考える。

さらに、この時期の所領形成に特徴的な要素として、多数の十分の一税取得地の集積があった。カンブレ司教による十分の一税確認文書は、十分の一税をめぐる問題が単なる在俗聖職者と修道院との争いとしてではなく、相当な広がりを持つコンテキストの上で考察されねばならないことを示している。女子修道院は祭務を執行する聖職者を必要としており、フォレ、グラン・ビガール、ラ・カンブル女子修道院においてその役割を担った聖職者達は、それぞれの女子修道院に属するメンバーとして域内に居住するとともに、所領内の教区教会においても周辺住民の宗教生活を主導した。また、各女子修道院は都市の守護聖人の遺物の管理していたために、巡礼や埋葬・死者供養によって都市の在俗聖職者および住民に開かれた存在となっていた。さらに、文書に記載された十分の一税の女子修道院への譲渡のプロセスは、在俗教会と修道院と俗人領主による妥協点の模索によって、在地における十分の一税を主軸とする地域秩序の再編の可能性を示していると考えられる。都市への恒常的な人口流入に伴って小教区教会が増加していったのは、まさにラ・カンブル修道院、フォレ修道院及びグラン・ビガール女子修道院によって所領形成が進められていた地域であった。

本稿では小教区の変遷を議論に組み込むことが出来なかったが、小教区教会の在俗聖職者と修道院所領経営との関連性・連動性が、ブリュッセル地域の空間形成の梃となっていたと考えられる。この点を今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 舟橋 倫子	4. 巻 34
2. 論文標題 La vie des religieuses dans les prieures de Forest et de Grand-Bigard de l'abbaye d'Afflighem (XIIe-debut de XIIIe siecle)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日仏歴史学会会報	6. 最初と最後の頁 3-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32200/bsfjsh.34.0_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 舟橋 倫子	4. 巻 104
2. 論文標題 中世盛期ブリュッセル地域の修道院所領ーラ・カンブル修道院13世紀前半文書の分析ー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文研紀要（中央大学）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 舟橋 倫子
2. 発表標題 中世盛期低ロタリングアにおける十分の一税再考 新たな分析視角と12世紀修道院による実践の分析ー
3. 学会等名 社会経済史学会九州部会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 舟橋 倫子
2. 発表標題 中世盛期南ネーデルラントの淡水魚
3. 学会等名 日本ハンザ史研究会第35回研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 舟橋 倫子
2. 発表標題 Reconsiderer le document baptise [Pactum]
3. 学会等名 ブリュッセル大学中世史セミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 舟橋 倫子
2. 発表標題 ベルギー南部の修道院における12・13世紀前半の十分の一税関連文書の分析と今後の展望
3. 学会等名 ブルゴーニュ公国史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 舟橋 倫子
2. 発表標題 Les abbayes feminines en region bruxellois a la periode du moyen age central
3. 学会等名 中世における教会と社会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 妹尾達彦、大原信正、前島佳孝、顔逸凡、松田亮、川越泰博、荷見守義、高遠拓児、榎本泰子、唐橋文、新免康、斯波照雄、舟橋倫子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 728
3. 書名 アフロ・ユーラシア大陸の都市と社会	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------